

日蓮大聖人御書全集

うえのどののははごぜんごへんじ

上野殿母御前御返事

しじゅうくにちぼだい こと

(四十九日菩提の事)

新版
1905
〜
1912

うえのどののははごぜんごへんじ しじゅうくにちぼだい こと
上野殿母御前御返事 (四十九日菩提の事)

こうあん ねん がつ にち さい うえののあま
弘安3年('80) 10月24日 59歳 上野尼

なんじようの こしちろうごろうどの しじゅうくにちごぼだい おく たも

南条故七郎五郎殿の四十九日御菩提のために送り給う

もの につき

がもくふた 結 はくまい いちだ いも いちだ

物の日記のこと。鵜目両ゆい・白米一駄・芋一駄・

播 豆 腐 蒟 蒻 かきひとこ 柚ごじゅうとううんぬん

すりどうふ・こんにやく・柿一籠・ゆ五十等云々。

ごぼだい おん ほけきよういちぶ じが げすうど だいまくひやくせんべん

御菩提の御ために、法華経一部・自我偈数度・題目百千返、

とな たてまつ そちら お

唱え奉り候い畢わんぬ。

ほけきよう もう おんきよう いちだいししょうぎよう に

そもそも法華経と申す御経は、一代聖教には似るべく

おんきよう

ほとけ ほとけ

もなき御経にて、しかも「ただ仏と仏とのみ」と説かれ

ほとけ ほとけ

知

とうがくい げ

ないし

て、ほとけ 仏と仏とのみこそしろしめされて、とうがくい 等覚已下、乃至

ぼんぷ 凡夫は叶わぬことかな

そうら

りゆうじゆぼさつ

だいろん

凡夫は叶わぬことに候え。されば、竜樹菩薩の大論には、

ほとけい げ

しん

ほとけ

成

み

そうろう

「仏已下はただ信じて仏になるべし」と見えて候。

ほけきよう

だいし

ほつしほん

い

やくおう

いまなんじ

つ

法華經の第四の法師品に云わく「薬王よ。今汝に告ぐ。

わ と

しよきよう

きよう

なか

ほつけ

我が説くところの諸經、しかもこの經において、法華

もつと だいいち

とううんぬん

だいがこ

かん

い

もんじゆしり

は最も第一なり」等云々。第五の卷に云わく「文殊師利よ。

ほけきよう

しよぶつによらい

ひみつ

ぞう

しよきよう

なか

この法華經は、諸仏如来の秘密の蔵にして、諸經の中にお

もつと

かみ

あ

とううんぬん

だいいち

かん

い

いて最もその上に在り」等云々。第七の卷に云わく「この

ほけきよう

しよきよう

なか

もつと

法華經もまたかくのごとく、諸經の中において、最もこ

れその上かみなり」。また云いわく「最もこれ照しやう明みやうなり。最も

これその尊そんなり」等とう云々。これらの経きやう文もん、私わたくしの義ぎにあら

ず。仏ほとけの誠じやう言ぼんにて候そうらえば、定さだめてよもあやまりは候そうらわ

じ。

民たみが家いえに生うまれたる者もの、「我われは侍さむらいに齊ひとし」なんど申もうせば、

必かならずとが来きたる。まして「我われ、国こく王おうに齊ひとし」、まして「勝すぐれ

たり」なんど申もうせば、我わが身みのとがとなるのみならず、父ふ母ぼ

と申もうし、妻さい子しとかならいい、必そんず損たいずること、大たい火かの宅いえを焼やき、

大たい木ぼくの倒たおるる時とき小しょう木ぼく等とうの損そんずるがごとし。

ぶつきよう

仏教もまたかくのごとく、華嚴・阿含・方等・般若・

だいにちきよう

あみだきようとう

よ

ひとびと

わ

しん

大日経・阿弥陀経等に依る人々の、我が信じたるままに、

しようれつ

わきま

わ

あみだきようとう

ほけきよう

さいとう

勝劣も弁えずして、「我が阿弥陀経等は法華経と齊等な

すぐ

もう

いちるい

ひとびと

り」はたまた「勝れたり」などと申せば、その一類の人々

わ きよう 讃

嬉

おも

かえ

失

は我が経をほめられうれしと思えども、還つてとがとなり

し でし

だんな

あくどう

お

や い

て、師も弟子も檀那も悪道に墮つること、箭を射るがごと

ほけきよう

いっさいきよう

すぐ

もう

そうろう

し。ただし、「法華経の一切経に勝れり」と申して候は

苦

かえ

だいくどく

そうろう

きようもん

くるしからず。還つて大功德となり候。経文のごとくな

ゆえ

るが故なり。

ほけきよう はじ むりようぎきよう もう きよう たと

この法華経の始めに無量義経と申す経おわします。譬え

だいおう みゆき おんとき しょうぐんぜんじん ろうぜき 鎮

ば、大王の行幸の御時、將軍前陣して狼籍をせずむるがご

むりようぎきよう い しじゅうよねん しんじつ

とし。その無量義経に云わく「四十余年にはいまだ真実を

あらわ とうろんぬん しょうぐん だいおう てき もの おおゆみ

顕さず」等云々。これは、將軍が大王に敵する者を大弓を

い 払 たち き 捨

もつて射はらい、また太刀をもつて切りすつるがごとし。

けこんぎよう よ けんこんしゅう あこんきよう りつそうとう かんぎよう ねんぶつしやとう

華嚴経を読む華嚴宗、阿含経の律僧等、觀経の念仏者等、

だいにちきよう しんごんしとう もの ほけきよう 従 責

大日経の真言師等の者どもが法華経にしたがわぬをせめ

靡 りけん ちよくせん たと さだとう よしいえ せ

なびかす利劍の勅宣なり。譬えば、貞任を義家が責め、清盛

よりとも う う むりようぎきよう しじゅうよねん もん

を頼朝の打ち失せしがごとし。無量義経の「四十余年」の文

は、不動明王の劍索、愛染明王の弓箭なり。

こなんじようのころうどの

しで

やま

さんず

かわ

こ

たま

とき

故南条五郎殿の、死出の山・三途の河を越し給わん時、

ぼんのう

さんぞく

ざいごう

かいぞく

しず

ことゆえ

りようぜんじようど

まい

煩惱の山賊、罪業の海賊を静めて、事故なく靈山浄土へ参

たも

おんとも

つわもの

むりようぎきよう

しじゆうよねん

らせ給うべき御供の兵者は、無量義経の「四十余年にはい

しんじつ

あらわ

もん

まだ真実を顕さず」の文ぞかし。

ほけきようだいいち

かん

ほうべんぼん

い

せそん

ほうひき

法華経第一の巻の方便品に云わく「世尊は法久しくして

のち

かなら

まさ

しんじつ

と

い

ししようじき

後、要ず当に真実を説きたもうべし」。また云わく「正直

ほうべん

す

むじようど

と

うんぬん

だいご

かん

に方便を捨てて、ただ無上道を説くのみ」云々。第五の巻に

い

けちゆう

みようじゆ

い

ひと

おう

云わく「ただ髻中の明珠のみ」。また云わく「独り王の

ちようじよう

ひと

たまあ

い

か

ごうりき

頂上ちようじようにのみこの一つの珠たまあ有り」。また云わく「彼の強力ごうりきの

おう

ひさ

みようじゆ

まも

いますなわ

あた

王おうの久ひさしく明珠みようじゆを護まもれるに、今乃いますなわちこれを与あたうるがごと

とううんぬん

もん

こころ

にほんこく

いつさいきよう

渡

しちせん

し」等とううんぬん云々。文もんの心こころは、日本国にほんこくに一切いつさいきよう経わたたれり。七千しちせん

さんびやくくじゆうくかん

かれがれ

きようぎよう

みな

ほけきよう

けんぞく

三百九十九卷さんびやくくじゆうくかんなり。彼々かれがれの経きようぎよう々みなは皆ほけきよう、法華けんぞく経わたの眷属けんぞくなり。

れい

にほんこく

なんによ

かず

しじゆうくおくくまんしせんはつびやくくにじゆうはちにん

例れいせば、日本国にほんこくの男女なんによの数かず、四十九億九万四千八百二十八人しじゆうくおくくまんしせんはつびやくくにじゆうはちにん

そちら

みな

いちにん

こくおう

けにん

候そちらえども、皆みな、一人いちにんの国王こくおうの家人けにんたるがごとし。

いつさいきよう

こころ

ぐち

によにん

いちじ

こころ得

一切いつさいきよう経こころの心こころは、愚癡ぐちの女人によにんなんどのただ一時いちじに心こころうべ

様

だいとう

組

そうろう

ざいもく

ほか

きようは、たとえ大塔だいとうをくみ候そうろうには、まず材木ざいもくより外ほかに、

あししろ

もう

おお

しようぼく

あつ

いちじようにじよう

結

上

足代あししろと申もうして多おおくのしようぼく小木あつを集いちじようにじようめ、一丈二丈結ばかりゆいあ

そうろう

結 上

ざいもく

だいとう

組 上

げ候なり。かくゆいあげて、材木をもつて大塔をくみあげ

そうら

かえ

あししろ

き

す

だいとう

そうろう

あししろ

候いつれば、返つて足代を切り捨て、大塔は候なり。足代

もう

いつさいきよう

だいとう

もう

ほけきよう

ほとけ

と申すは一切経なり、大塔と申すは法華経なり。仏

いつさいきよう

と

たま

ほけきよう

と

たま

一切経を説き給いしことは、法華経を説かせ給わんための

あししろ

足代なり。

しょうじき

ほうべん

す

もう

ほけきよう

しん

ひと

「正直に方便を捨つ」と申して、法華経を信ずる人は、

あみだきようとう

なむあみだぶつ

だいにちきようとう

しんごんしゅう

あごんぎようとう

阿弥陀経等の南無阿弥陀仏、大日経等の真言宗、阿含経等

りつしゅう

にひやくごじつかいとう

き

捨

なげう

ほけきよう

の律宗の二百五十戒等を切りすて抛つてのち、法華経を

たも

そうろう

だいとう

組

あししろたいせつ

ば持ち候なり。大塔をくまんがためには足代大切なれど

だいたう 組 上 あししろ き お しょうじき

も、大塔をくみあげぬれば、足代を切り落とすなり。「正直

ほうべん す もう もん こころ あししろ どう しゅつたい

に方便を捨つ」と申す文の心これなり。足代より塔は出来

そうら とう す あししろ 押 ひと いま よ

して候えども、塔を捨てて足代をおがむ人なし。今の世の

どうしんじやとう いっこう なむあみだぶつ とな いっしょう 過

道心者等、一向に南無阿弥陀仏と唱えて一生をすごし、

なんみょうほうれんげきよう いっぺん とな ひとびと だいとう 捨 あししろ

南無妙法蓮華経と一返も唱えぬ人々は、大塔をすてて足代

押 ひとびと せけん 賢 果 無 ひと もう

をおがむ人々なり。世間に「かしこくはかなき人」と申す

はこれなり。

こしちろうごろうどの どうせい にほんこく ひとびと 似 たま

故七郎五郎殿は、当世の日本国の人々にはにさせ給わず、

幼 こころ かしこ ちち あと 追 おんとし

おさなき心なれども、賢き父の跡をおい、御年いまだ

はたちにも及ばぬ人が、南無妙法蓮華経と唱えさせ給いて

ほとけ 成 たま ひと

仏にならせ給いぬ。「二りとして成仏せざることなけん」

こ ねが ひも わ こ こい おぼ

はこれなり。乞い願わくは、悲母、我が子を恋しく思しめし

たま なんみようほうれんげきよう と な たま こなんじようどの こ

給いなば、南無妙法蓮華経と唱えさせ給いて、故南条殿・故

ごろうどの いっしょ う ねが たま たね たね べつ

五郎殿と一所に生まれんと願わせ給え。一つ種は一つ種、別

たね べつ たね おな みようほうれんげきよう たね こころ 孕 たま

の種は別の種、同じ妙法蓮華経の種を心にはらませ給いな

おな みようほうれんげきよう くに う たも さんにな かお

ば、同じ妙法蓮華経の国へ生まれさせ給うべし。三人、面を

並 たま と き おんよろこ 嬉 思

ならべさせ給わん時、御悦びいかがうれしくおぼしめすべ

きや。

そもそも、この法華經法華經を開闢ひらいて拜見はいけん拜見つかまつ仕仕

そつら

によらい

すなわ

ころも

り候おほ俵おほえば、「如来如来は則げん則いまちために衣しよぶつ衣しよぶつをもつてこ

おほ

たほう

げん

いま

しよぶつ

れを覆ごねん覆ごねんいたもう。また他ごねん方ごねん他ごねん方ごねんの現ごねん現ごねんに在ごねん在ごねんす諸ごねん仏ごねん諸ごねん仏ごねん

ごねん

とう

うんぬん

きようもん

の護ごねん念ごねん護ごねん念ごねんしたもうところとならん」等ごねん等ごねん云ごねん々ごねん去ごねん々ごねん。經ごねん文ごねん

ごねん

とうざいなんぼく

はつぼう

さんぜん

經ごねん文ごねんの心ごねん心ごねんは、東ごねん西ごねん南ごねん北ごねん東ごねん西ごねん南ごねん北ごねん・八ごねん方ごねん八ごねん方ごねんならびに三ごねん千ごねん

だいせんせかい

ほか

しひやくまんおく

なゆた

主ごねん千ごねん大ごねん千ごねん世界ごねん大ごねん千ごねん世界ごねんの外ごねん外ごねん、四ごねん百ごねん万ごねん億ごねん四ごねん百ごねん万ごねん億ごねん那ごねん由ごねん他ごねん那ごねん

ごくど

じつぼう

しよぶつ

簇々

申ごねん他ごねんの国ごねん土ごねん圍ごねん土ごねんに、十ごねん方ごねん十ごねん方ごねんの諸ごねん仏ごねん諸ごねん仏ごねんぞくぞくぞくぞくぞく

じゆうまん

たも

てん

ほし

ち

と充ごねん満ごねん充ごねん満ごねんせさせ給ごねん給ごねんう。天ごねん末ごねんには星ごねん畢ごねんのごとく、地ごねんには

とうま

な

い

たま

ほけきよう

ぎようじや

しゆい

稻ごねん麻ごねんのようごねんに並ごねんみ居ごねんさせ給ごねんい、法ごねん華ごねん經ごねんの行ごねん者ごねんをごねん守ごねん護ごねんせさせ

たも だと だいおう たいし もろもろ しんげ しゅご

給うこと、譬えば大王の太子を 諸の臣下の守護するがご

してんのういちるい 守 たま 忝

とし。ただ四天王一類のまぼり給わんことのかたじけなく

そうろう いっさい してんのう いっさい しようしゆく いっさい にちがつ たいしゃく

候に、一切の四天王、一切の星宿、一切の日月、帝釈・

ぼんてんとう しゅご たも た うえ いっさい

梵天等の守護せさせ給うに足るべきことなり。その上、一切

にじよう いっさい ぼさつ とそつないいん みろくぼさつ からだせん じぞう

の二乗、一切の菩薩、兜率内院の弥勒菩薩、迦羅陀山の地藏、

ふだらくせん かんぜおん しょうりようせん もんじゆしりぼさつとう おのおのけんぞく

補陀落山の観世音、清涼山の文殊師利菩薩等、各々眷属を

ぐそく ほけきよう ぎようじゃ しゅご たま た

具足して法華経の行者を守護せさせ給うに足るべきこと

そうろう 忝 しゃか たほう じつぼう しょぶつ

に候に、またかたじけなくも、釈迦・多宝・十方の諸仏の、

手 自 きた たま ちゆうやじゆうにとき まも たま

てずからみずから来り給いて、昼夜十二時に守らせ給わん

ことのかたじけなさ、申すばかりなし。

おんきよう　こごろうどの　ごしんよう

ほとけ

かかるめでたき御経を故五郎殿は御信用ありて仏にな

たま　きよう　しじゆうくにち

たま　いっさい　しよぶつ

らせ給いて、今日は四十九日にならせ給えば、一切の諸仏、

りようぜんじようど　あつ　たま

て　据

靈山浄土に集まらせ給いて、あるいは手にすえ、あるいは

いただき　摩

抱　よろこ　つき　はじ

頂をなで、あるいはいだき、あるいは悦び、月の始めて

い　はな　はじ　咲

出でたるがごとく、花の始めてさけるがごとく、いかに愛し

たも

まいらせ給うらん。

さんぜじつぼう　しよぶつ　強

そもそも、いかなれば三世十方の諸仏はあながちにこの

ほけきよう　まも　たも　かんが　そうら　どおり　そうら

法華経をば守らせ給うと勘えて候えば、道理にて候いけ

ほけきよう もう さんぜじつぼう しょぶつ ふぼ 乳母

るぞ。法華經と申すは、三世十方の諸仏の父母なり、めのと

なり、主にてましましけるぞや。かえると申す虫は母の音を

食とす。母の声を聞かざれば生長することなし。からぐら

と申す虫は風を食とす。風吹かざれば生長せず。魚は水を

たのみ、鳥は木をすみかとす。仏もまたかくのごとく、

法華經を命とし、食とし、すみかとし給うなり。魚は水に

すむ。仏はこの經にすみ給う。鳥は木にすむ。仏はこの

經にすみ給う。月は水にやどる。仏はこの經にやどり給

う。この經なき国には仏ましますことなしと御心得ある

るぞ。法華經と申すは、三世十方の諸仏の父母なり、めのと

なり、主にてましましけるぞや。かえると申す虫は母の音を

食とす。母の声を聞かざれば生長することなし。からぐら

と申す虫は風を食とす。風吹かざれば生長せず。魚は水を

たのみ、鳥は木をすみかとす。仏もまたかくのごとく、

法華經を命とし、食とし、すみかとし給うなり。魚は水に

すむ。仏はこの經にすみ給う。鳥は木にすむ。仏はこの

經にすみ給う。月は水にやどる。仏はこの經にやどり給

う。この經なき国には仏ましますことなしと御心得ある

そつろつ

べく候。

こしやく

りんだおう

もう

おう

なんえんぶだい

しゆ

古昔、輪陀王と申せし王おわしき。南閻浮提の主なり。

おう

何

くご

たま

たず

はくば

この王はなにをか供御とし給いしと尋ぬれば、白馬の

嘶

き

じき

たも

おう

はくば

嘶

いななくを聞いて食とし給う。この王は、白馬のいななけ

とし

わか

いろ

さか

たましい

潔

ちから

強

ば年も若くなり、色も盛んに、魂もいさぎよく、力もつよ

まつりごと

あき

ゆえ

くに

はくば

おお

く、また政事も明らかなり。故に、その国には白馬を多く

集

か

たと

ぎおう

もう

おう

つる

おお

あつめ、飼いしなり。譬えば、魏王と申せし王の鶴を多く

とくそうこうてい

蜚

あい

はくば

嘶

あつめ、徳宗皇帝のほたるを愛せしがごとし。白馬のいなな

はくちよう

な

ゆえ

はくちよう

くことは、また白鳥の鳴きし故なり。さればまた、白鳥を

多く集めしなり。

とお あつ

ある時、いかんがしけん、白鳥皆うせて白馬いななかざ

とき

はくちようみな失 はくば 嘶

りしかば、大王、供御たえて、盛んなる花の露にしおれし

だいおう

くご絶

さか

はな つゆ

萎

がごとく、満月の雲におおわれたるがごとし。この王既に

まんげつ

くも

覆

おうすで

かくれさせ給わんとせしかば、后・太子・大臣・一国、皆母

隠

たま

きさき

たいし

だいじん

いっこく

みなはは

に別れたる子のごとく、皆色をうしないで涙を袖におびた

わか

こ

みないろ

失

なみだ

そで

帯

り。いかんせん、いかんせん。

その国に外道多し。当時の禅宗・念仏者・真言師・律僧

くに

げどうおお

とうじ

ぜんしゆう

ねんぶつしや

しんごんし

りつそう

等のごとし。また仏の弟子も有り。当時の法華宗の人々の

とう

ほとけ

でし

あ

とうじ

ほつけしゆう

ひとびと

ごとし。中なか悪あしきこと水すい火かなり。胡こと越えつとに似にたり。大王だいおう、

勅ちよくせん宣くだを下いして云いわく「一切いっさいの外げ道どうこの馬うまをいななかせば、

仏ぶつ教きようを失うしなつて一いっ向こうに外げ道どうを信しんぜんこと諸しよ天てんの帝たい釈しやくを敬うやま

うがごとくならん。仏ぶつ弟子でしこの馬うまをいななかせば、一切いっさいの

外げ道どうの頸くびを切きり、その所ところをうばい取とつて仏ぶつ弟子でしにつくべし」

と云うんぬん々げどう。外げ道どうも色いろをうしない、仏ぶつ弟子でしも歎なげきあえり。

しかれども、さてはつ果べきことならねば、外げ道どうは先さきに七しち日にち

を行おこないき。白はく鳥ちようも来きたらず、白はく馬ばもい嘶ななかず。後のち七しち日にちを

仏ぶつ弟子でしに渡わたして祈いのらせしに、馬め鳴みと申もうす小しょう僧ぞう一いち人にんあり。

しよぶつ

ごほんぞん

たも

ほけきよう

しちにちいの

諸仏の御本尊とし給う法華経をもつて七日祈りしかば、

はくちようだんじよう

と

きた

とり

ひとこえな

ひとうま

ひとこえ

白鳥壇上に飛び来る。この鳥、一声鳴きしかば、一馬、一声

嘶

だいおう

うま

こえ

き

やまい

とこ

起

たも

きさき

いななく。大王は馬の声を聞いて病の牀よりおき給う。后

はじ

しよにん

めめよう

む

らいはい

はくちよう

いち

より始めて諸人、馬鳴に向かつて礼拝をなす。白鳥、一・

に

さんないしじゆう

ひやく

せんしゆつたい

こくちゆう

じゆうまん

はくば

二・三乃至十・百・千出来して国中に充満せり。白馬

嘶

ひとうまふたうまないしひやく

せん

はくば

嘶

しきりにいななき、一馬二馬乃至百・千の白馬いななきし

だいおう

こえ

き

めんぼう

さんじゆう

こころ

かば、大王この音を聞こしめし、面貌は三十ばかり、心は

ひ

あき

まつりごとししようじき

てん

かんろ降

日のごとく明らかに、政 正直なりしかば、天より甘露ふ

くだ

ちよくふうばんみん

靡

むりようひやくさい

よ

おさ

たま

り下り、勅風万民をなびかして、無量百歳、代を治め給い

き。

ほとけ

たほうぶつ

もう

ほとけ

きよう

仏もまたかくのごとく、多宝仏と申す仏は、この経に

たま

ごにゆうめつ

きよう

読

よ

しゆつげん

たも

あい給わざれば御入滅、この経をよむ代には出現し給う。

しやかぶつ

じつぼう

しよぶつ

ふしぎ

釈迦仏・十方の諸仏もまたまたかくのごとし。かかる不思議

とく

きよう

きよう

たも

ひと

の徳まします経なれば、この経を持つ人をば、いかでか

てんしやうだいじん

はちまんだいぼさつ

ふじせんげんだいぼさつ捨

たも

天照太神・八幡大菩薩・富士千眼大菩薩すてさせ給うべき

頼

きよう

怨

くに

と、たのもしきことなり。またこの経にあだをなす国をば、

しやうじき

いの

そうち

かなら

くに

しちなんお

いかに正直に祈り候えども、必ずその国に七難起こつて、

たこく

やぶ

ほうこく

そうろう

たいかい

なか

たいせん

他国に破られて亡国となり候こと、大海の中の大船の

おおかせ あ だいかんばつ そうもく か

大風に値うがごとく、大早魃の草木を枯らすがごとしと

思 とうじ にほんこく 祈 そうろう にちれん

おぼしめせ。当時、日本国のいかなるいのり候とも、日蓮

いちもん ほけきよう ぎようじや 悔 たま

が一門・法華経の行者をあなずらせ給えば、さまさまの御

祈 かな だいもうここく 責 亡

いのり叶わずして、大蒙古国にせめられて、すでにほろび

いま ごらん そうろう

んとするがごとし。今も御覧ぜよ。ただかくては候まじ

みな ほけきよう 怨 たも ゆえ ごしんよう

きぞ。これ皆、法華経をあだませ給う故と御信用あるべし。

こごろうどの 隠 たま すで しじゆうくにち むじよう

そもそも、故五郎殿かくれ給いて既に四十九日なり。無常

常 なら 打 聞 ひと

はつねの習いなれども、このことはうちきく人すら、なお

忍 況 はは め ひと こころ

しのびがたし。いおうや、母となり妻となる人をや。心の

推量 ほうおしはかられて 候。人の子にはおさなきもあり、

大人

おとなしきもあり、みにくきもあり、かたわなるもあり、

思

おもいになるべきにや、おのこごたる上、かたわにもなし、

弓矢

障

こころ

情

こうえのどの

さか

ゆみやにもささいなし、心もなさけあり。故上野殿には盛

とき後

歎

あさ

こ

孕

んなりし時おくれてなげき浅からざりしに、この子をはら

産

ひ

い

みず

い

みていまださんなかりしかば、火にも入り水にも入らんと

おも

こ

へいあん

たれ

誂

み

思いしに、この子すでに平安なりしかば、誰にあつらえて身

投

おも

こころ

慰

をもなぐべきと思つて、これに心をなぐさめて、この

じゅうし

ごねん

過

十四・五年はすぎぬ。

いかにいかにとすべき。二人のおのこごにこそになわれふたり 男 子 担

めと、たのもしく思い候いつるに、今年九月五日、月を雲頼 おも そらら ことしくがついつか つき くも

にかくされ、花を風にふかせて、ゆめかゆめならざるか、隠 はな かせ 吹 夢 夢

あわれひさしきゆめかなと、なげきおり候えば、うつつに久 夢 歎 居 そらら 現

にて、すでに四十九日はせすぎぬ。まことならばいかんが似 しじゅうくにち 馳 過 真

せん、いかんがせん。さける花はちらずして、つぼめる花の枯 老 はは 留 若 子 去 蕾 はな

かれたる。おいたる母はとどまりて、わかきこはさりぬ。情 無 むじよう むじよう

なさけなかりける無常かな、無常かな。情 無 くに 厭 捨 たま

かかるなさけなき国をばいといすてさせ給いて、故五郎情 無 くに 厭 捨 たま ことごろう

どの ごしんよう 付 ほけきよう たま じようじゆう ふえ

殿の御信用ありし法華経につかせ給いて、常住不壊の

霊 ぜんじようど 詣 たま 父 霊 山

りよう山浄土へまいらせさせ給え。ちちは、りようぜんに

はは しやば 留 ふたり ちゆうげん

まします。母は娑婆にとどまれり。二人の中間におわしま

こころ こころ 思 覚 そら

す故五郎殿の心こそおもいやられて、あわれにおぼえ候

こと お も 止 そら お

え。事多しと申せども、とどめ候い了わんぬ。恐々謹言。

じゆうがつに に じゆうよつか にちれん かおう

十月二十四日 日蓮 花押

うえのどののははあまごぜんごへんじ

上野殿母尼御前御返事